慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | テオドア・レッシングの論文「騒音」に関する批判的考察 : 疑似科学性とプロパガンダ |
| Sub Title | Theodor Lessings Kampfschrift ,,Der Lärm" : zwischen Pseudowissenschaftlichkeit und Propaganda |
| Author | Knaup, Hans-Joachim |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2018 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.55 (2018. ) ,p.173- 185 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | ハンス・ヨアヒム・クナウプ教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Hans-Joachim Knaup |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20180331-0173 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# テオドア・レッシングの論文「騒音」に関する批判的考察
## ――疑似科学性とプロパガンダ――

クナウプ　ハンス・ヨアヒム

### 1. 時代現象としての騒音と神経衰弱

産業革命の進行に伴い，とりわけ都市においては静寂が失われていった。機関車が轟音をとどろかせ，工場の騒音は絶え間なく続き，路面電車の軋み音，自動車の冷却ファンのバタバタという音，狭い路地や道に鳴り響くピアノやレコードのすさまじい騒音。生活が忙しくなると共に，これまで以上の騒音が生み出されたのである。

アメリカの神経科医ジョージ・バード（George Beard）は，ニューヨークの出版社 George Putnam's Sons で著書を出版，そのタイトルは "American nervousness: its causes and consequences, a supplement to Nervous exhaustion (neurasthenia)" であった。バードは，American nervousness という国民的規模の神経衰弱症が存在することを最初に指摘した医師であった。バードによれば，止むことなき騒音や過剰な視覚刺激，それに人の群れなど，それらの攻撃に晒されていると感覚が奪われていくことになるのだ[1)]。生活のテンポはますます速くなり，騒音は一層大きく

1）Vgl. das Kapitel: Die Neurasthenie als amerikanische und als Deutsche Krankheit. In: Joachim Radkau, *Das Zeitalter der Nervosität. Deutschland zwischen Bismarck und Hitler*. Hanser 1998, S.49 ff.

なる。このような展開に歩調を合わすことができずに，人間は苦しむことになる。バードは，都市のなかで騒音が種々の有害な影響を及ぼすことを警告。それが身体面で重い症状を引き起こす可能性を指摘している。実際，この時期に新しい神経病の出現を示す多くの診断事例が存在している。1900 年頃には，どの市町村でも神経科医が必要な事態になっていたのである。

このような状況を背景にして，心理学関連の文献のなかに「アメリカ的神経衰弱」（amerikanische Nervosität）という言葉が出現したのである。作家ジョン・ガードナー（John Girdner）は，「アメリカ的神経衰弱」を「ニューヨーク病」（Newyorkitis）と名付けた方がよいのではないかと提案している。ガードナーによると，この病は「大都市の生活がもたらした結果の一つ」であり，ニューヨークの名前を冠した方が病の特徴を端的に表現できるということになる[2)]。ドイツにおいてもすでに以前から，医者や心理学者のあいだに，道路の騒音がもたらす有害な影響を心配する声は存在していた。医学専門誌や主要な新聞には，大都市のサウンドスケープの悪化が進行している状況について詳細な報告が掲載された。医者や心理カウンセラーは，過剰な騒音のもたらす様々な現象に自分たちが直面している事態を認識していたし，都市の保健局の役人や衛生学分野の専門家は，騒音が引き起こす障害の増大を明確に示すデータの作成に取り組んだ。技術者，建築家，都市計画家は騒音を減少させる方法を模索し始めたのである。

健康衛生問題に関する会議や講演においても，騒音や騒音回避は重要なテーマになっていった。騒音は，1900 年頃に蔓延し始めるさまざまな神経疾患の原因の一つとみなされるようになった。このころ流行り出した精神疾患は「神経衰弱」という概念を纏って医学界の議論の対象となるが，この「神経衰弱」の一因として騒音が取り上げられたのである。このよう

2）Philipp Blom: *Der taumelnde Kontinent. Europa 1900–1914*. Hanser 2008, S.306.

な状況のなかで。騒音に対する反対運動が組織化されるようになり，この運動の重要な先駆者が文化哲学者テオドア・レッシング（Theodor Lessing, 1872–1933）であった。

レッシングは 1872 年 2 月 8 日，ユダヤ人医師の息子として北ドイツのハノーファーに生まれ，父親の希望もあって，もともと医者になることが期待されていた。レッシングはミュンヘン大学に在籍していた当時，にミュンヘン北部シュヴァービングに定住するボヘミアンたちとの繋がりで，新聞や雑誌の文芸欄に文化批判の記事を書いて注目されるようになった。レッシングはミュンヘンのミュラー通り 17 番地にある老婦人の家に間借りしていたが，そこはヴァリエテの小屋などが乱立した通りの騒音の激しい所であり，そのけたたましい騒音のためにレッシングは睡眠を妨害されるような事態に直面したのである。

> 私がかつて住んでいたところは極めて騒々しかった。家の後方と前方にそれぞれミュンヘンで知られたヴァリエテの小屋があり，後方の小屋は「ブルーメンゼーレ」，前方のは「キルス・コロセウム」という名前であった。私の寝床は洪水のように押し寄せる騒音の只中にあった。毎朝起きる度に，「もう引っ越すぞ！　眠れやしない」と呪ったものだ[3)]。

レッシングは多くの読者を得ていた月刊誌『北と南』に 1901 年およびその翌年にかけて，大都市の交通が生み出す「新たな災い」を問題にした二つの論文を発表している。レッシングはニューヨークとロンドンにおける騒音防止運動の勃興に特別な関心を持っていた。ニューヨークでは 1906 年，女医で富豪のジュリア・バーネット・ライス（Julia Barnett Rice, 1860–1929）により「反騒音協会」（Society for the Suppression of

3）Theodor Lessing, Einmal und nie wieder. *Lebenserinnerungen*, Gütersloh o.J. (1969), S.290.

Unnecessary Noise）が設立され，その後に類似の協会がロンドン，ブリュッセル，ウィーン，ロッテルダムにも作られていくなかで，ドイツ帝国内部にも同じような組織を立ち上げるべきだという気運が盛り上がってきた。

レッシングは 1908 年 10 月「ドイツ騒音防止連盟」（Deutscher Lärmschutzverband）を設立。この組織は「反騒音協会」を意味する „Antilärmverein“ という分かり易い名称で一般に知られていくことになる。ハノーファー工科大学の哲学科講師になっていたレッシングは，1908 年 3 月，この運動を進めるために，「騒音――生活騒音反対宣言」（Der Lärm, eine Kampfschrift gegen die Geräusche unseres Lebens）という表題の論文を発表した。このなかで，レッシングは同時代の議論の論点を整理し，それは騒音に関する哲学的論文のようなものに発展していった。レッシングは騒音を西洋文化の退廃現象とみなしたのである。しかしレッシングは，この論文を理論的なものというよりも，騒音反対の運動を鼓舞するためのアピールと考えていた。レッシングはアメリカやイギリスの事例を多く紹介しているが，それはドイツよりもアメリカ，イギリスの方が耳にたいする衛生学的関心がこれまで大きかったことに起因している。

## 2. 叢書『精神神経境界域の諸問題』

レッシングの論文『騒音――生活騒音反対宣言』は今日一般の目に触れる機会はないので，以下にまず，この論文が掲載された叢書『神経および精神生活の境界域の諸問題』について簡単に紹介し，レッシング論文が掲載された号の目次（資料 1）から，刊行されたメディアとしての性格を再現してみたい。

叢書『神経および精神生活の境界域の諸問題』の副題に「すべての階層の教養人士に向けて」（„für Gebildete aller Stände“）とあるように，この一連の刊行物は精神神経に関する専門医学誌ではなく，精神神経の医学的現象，およびその原因と考えられる社会的要因のあいだの「境界領域」に

存在するさまざまな問題を「個別」に「記述」することを目指しており，特定の階層に向けられたものではないことが強調されている。しかし「教養人士」に向けたものであることも明示されており，精神神経系の病と社会の関係に関心があり，一定の専門的水準を読み解ける読者層を想定している，と言えるであろう。この刊行を創始したのはレオポルト・レーヴェンフェルト（Leopold Loewenfeld, 1847–1923）とハンス・ゲオルク・クレラ（Hans Georg Kurella, 1858–1916）である。レーヴェンフェルトは性病理学のパイオニアであり，シカゴで精神科の病院を開業。その後ミュンヘンに戻り，1878年から精神病や電気療法の専門医として活動した。多くの著作を残している。クレラは心理療法士，ブレスラウ近郊ブリークにある精神病院の上級医師，さらに「生まれながらの犯罪者」の存在を主張する人種論のイタリア人理論家セザーレ・ロンブロッソ（Cesare Lombroso）の高弟であり，自らも犯罪者の自然史に関する著書を執筆した。それは結果として人種イデオロギーの宣伝に役立つことになった。なお，レッシングの論文が掲載されている『神経および精神生活の境界域の諸問題』第9巻（1908年ヴィースバーデンのJ. F. ベルクマン社から刊行）の編者はレーヴェンフェルト一人であった。

GRENZFRAGEN
DES
NERVEN- UND SEELENLEBENS.
EINZEL-DARSTELLUNGEN
FÜR
GEBILDETE ALLER STÄNDE.
BEGRÜNDET VON
Dr. L. LOEWENFELD UND Dr. H. KURELLA.
IM VEREINE MIT HERVORRAGENDEN FACHMÄNNERN
DES IN- UND AUSLANDES
HERAUSGEGEBEN VON
DR. L. LOEWENFELD
IN MÜNCHEN.

NEUNTER BAND (HEFT 34, 36—37).

Inhalt:

Lessing: Der Lärm. Eine Kampfschrift gegen die Gerüsche unseres Lebens.
v. Ehrenfels: Sexualethik.
Loewenfeld: Homosexualität und Strafgesetz. Nach einem in der kriminalistischen Sektion des akademisch-juristischen Vereins zu München am 17. September 1907 gehaltenen Vortrage.
Bumke: Landläufige Irrthümer in der Beurteilung von Geisteskranken.
Sadger: Konrad Ferdinand Meyer. Eine pathographisch-psychologische Studie.
Vorberg: Gay de Maupassants Krankheit.
Kotik: Die Emanation der psychophysischen Energie. Eine experimentelle Untersuchung über die unmittelbare Gedankenübertragung im Zusammenhang mit der Frage über die Radioaktivität des Gehirns.
Waldstein: Das unterbewusste Ich und sein Verhältnis zu Gesundheit und Erziehung. Autorisierte Übersetzung von Frau G. Yaraguth.

WIESBADEN.
VERLAG VON J. F. BERGMANN.
1908

*) Heft 33 bis mit Bd. VIII, erschienen.

資料１　1908年刊行『神経および精神生活の境界域の諸問題』の目次
（バイエルン州立図書館所蔵）

この巻の巻頭を飾ったのは，レッシングの論文「騒音――生活騒音反対宣言」である。その内容の紹介に入る前に，同じ巻にどのようなテーマの

論文が存在していたのか，またそれらの論文の執筆者はどのような人物であったのか，まずそこに目を向けてみよう。このことは，騒音の問題が当時どのような文脈のなかで議論されていたのかを再構成する上で必要な作業の一つである。

レッシングの論文に続く二番目の論文は，クリスティアン・フォン・エーレンフェルス男爵（Christian Freiherr von Ehrenfels，1859–1932）の「性倫理」（Sexualethik）であった。フォン・エーレンフェルスはオーストリアの哲学者，プラハ大学哲学科の教授で，マックス・ブロートやカフカもエーレンフェルスの授業を聴いたと言われている。文化学や性の制度に関する著作を多く残し，一夫一妻制の文化的弊害を詳細に論じたことで有名である。三番目の論文はレーヴェンフェルトの「ホモセクシュアルと刑事法」（Homosexualität und Strafgesetz.），これはミュンヘンの学術法学協会の犯罪セクションで行った講演を基にした論文であった。四番目の論文はオスヴァルト・ブムケ（Oswald Bumke，1877–1950）の「精神病者に関する診断に見られる一般的誤謬」（Landläufige Irrtümer in der Beurteilung von Geisteskranken.）。ブムケはドイツ人精神科医，神経科医であり，その啓蒙的著書は広く読まれていた。1928 年から翌年にかけてミュンヘン大学の学長に就任，22 年間にわたってミュンヘンの神経病院の院長を務めた。神経学の普及において大きな功績を残したが，医学と社会の境界領域上の問題についても積極的に発言している。続く五番目の論文は，イジドール・イサーク・サドガー（Isidor Isaak Sadger，1867–1942）の『コンラート・フェルディナント・マイヤー――病理学的・心理学的研究 』（Konrad Ferdinand Meyer. Eine pathographisch-psychologische Studie.）である。サドガーはユダヤ人医師，ウィーンに住むハンガリー系の心理分析家である。サドガーはフロイトの心理分析理論に共鳴した最初の医師の一人であり，特に作家の伝記的記述に心理分析の手法を取り入れた草分け的存在である。クライスト，レーナウそしてマイヤーに関する記述は有名であり，ウィーンの複数の新聞に文芸時評や劇評を執筆した。サ

ディズムとマゾヒズムを合成したサドマゾキズムという概念は，サドガーの 1913 年の論文に由来すると言われている。

以上，五番目の論文まで，タイトルおよび著者に関する簡単な説明によって概観してきたが，「神経および精神生活の境界域」という概念が内包しているテーマが，①性とモラル規範の軋轢（法律上の問題にもなる）が神経・精神に及ぼす作用，②精神・神経病に関する一般社会と専門家のあいだの理解水準の乖離現象，③個性的作家の生涯を分析することによって精神分析が個人の生の考察に有効であることを例示，というふうに幅広い問題に及んでいることが分かるであろう。六番目の論文のテーマは「ギ・ド・モーパッサンの病気」（Guy de Maupassants Krankheit.）であり，五番目の論文のテーマ域にあるものと言えよう。著者ガストン・フォアベルク（Gaston Vorberg, 1875–1947）は神経科医，『神経病に苦しむ人々への助言』（Ratschläge für Nervenleidende, 1919）などの医学書の他，『悪徳の風俗史』（Sittengeschichte des Lasters, 1927）に複数の論文を寄稿するなど多彩な著作活動を展開した。七番目の論文は長い表題「精神物理的エネルギーの流出，脳における放射能性の問題に関連する想念の直接移行に関する実験研究」（Die Emanation der psychophysichen Energie. Eine experimentelle Untersuchung über die unmittelbare Gedankenübertragung im Zusammenhang mit der Frage über die Radioaktivität des Gehirns.）を持ち，著者ナウム・コーティク（Naum W. Kotik, 1876–1920）はモスクワ在住のロシアの神経科医。1903 年にフランスの科学者ルネ・ブロンロにより報告された「N 線」（エヌせん，英語：N ray）に関連する論文を多く執筆，上記のものもそのテーマ域のものであろう。八番目の論文はルイス・ヴァルトシュタイン（Louis Waldstein, 1853–1915）の「無意識の自我及びそれと健康，教育との関係」（Das unterbewusste Ich und sein Verhältnis zu Gesundheit und Erziehung.）であり，元は英語論文 “The Subconscious Self and Its Relation to Education and Health”，New York, Charles Scribner’s Sons, 1905 で，ドイツ語訳は G. ヴェラグート（G.

Veraguth）が担当した。ヴァルトシュタインの著書はシュタイナーの蔵書にもあることが知られており，人智学およびその実践との関わりで話題になることがある。

このような一連の著名な専門家の諸論考のなかで，レッシングの「騒音――生活騒音反対宣言」は極めて個性的なタイトルである。叢書名『精神神経境界域の諸問題』からして，レッシングの論文が，神経精神病と社会問題の関連する境界域を扱ったテーマとしては最も掲載論文に相応しいと考えられたのではないだろうか。おそらく，この点がレッシングの論文が巻頭を飾った最大の理由があると言えるだろう。

## 3．レッシングの論文「騒音」

レッシングの論文の副題「生活騒音反対宣言」から読み取れるように，この論文は時代のさまざまな病の原因となっている騒音に対する抗議書であり，騒音をテーマにした一般的な学術論文とは異なるものである。5 章 93 ページにわたってレッシングは騒音に関する詳細な論を展開しているが，レッシングは序文のなかで，この論文執筆の動機は学術的なものではないことを明確にしている――

> 「騒音や雑音に関する若干の考察を記述するつもりであるが，筆者の学術的な動機はごく僅かなものである。筆者にとっての関心事は，むしろ長い期間にわたる恨みと怒りから自分を解き放つことにある。」[4)]

つまり，論文執筆の動機が個人的なものであること，騒音や雑音に苦しめられた結果として書くことにより「恨みと怒り」[5)] から自分を解放する

---

4）Theodor Lessing: Der Lärm. Eine Kampfschrift gegen die Geräusche unseres Lebens. In: (Hg. L. Loewenfeld) Grenzfragen des Nerven- und Seelenlebens Bd.9, Heft 54, Wiesbaden, J. F. Bergmann 1908, S.1.

5）Th. Lessing: Der Lärm, S.1.

ことにあると宣言されているのである。

レッシングは自分の論文が掲載誌の巻頭に置かれていることについても，「神経および精神生活の境界域の諸問題」のなかで「騒音」がまず取り上げられることは正当なことだと述べ，その理由として，「音響心理学」「感覚生理学」「心理物理学」[6]，あるいは衛生学や経済・社会政策学などのさまざまな学術領域が「騒音」という大きな社会問題に，それぞれの視点から取り組まねならない状況にあることを挙げている。レッシングは当時ハノーファー工科大学の哲学科の講師を務めていたこともあり，哲学的観点からみても「騒音」が重要なテーマになっているとの主張も展開している。

レッシングはさらに，騒音に反対する国際的な組織の実現に期待を寄せており，それは刑法上・民法上の法整備，行政及び警察における立法措置に影響を及ぼすべきであると言っている。但し，レッシングはこの戦いのキャンペーンの先頭に立つ気持ちはまったく持ち合わせていない。自分の論文は，問題の所在を明らかにし，読者に熟考を促すことを目指すのみであり，「現代の生活における過剰な騒音に反対する広範な戦いに向けた合図」[7] とみなしてほしい旨が述べられている。このようにレッシングはこの論文のなかでは控えめな立場を鮮明にしているが，論文発表の年には積極的な活動に打って出てもいるのである。1908 年，レッシングはハノーファーに反騒音協会を設立，この協会の機関誌として雑誌『反騒音，静寂の権利。ドイツの経済・商業・交易生活における騒音・粗野・非文化に反対する戦いのための月刊雑誌』[8] を刊行している。この雑誌は，レッシングが数年前から社会病である騒音に対して遂行すること意図していた「闘

6）Th. Lessing: Der Lärm, S.1.

7）Th. Lessing: Der Lärm, S.1.

8）Theodor Lessing: Der Antirüpel. Monatsblätter zum Kampf gegen Lärm, Roheit und Unkultur im deutschen Wirtschafts-, Handels- und Verkehrsleben. Organ des deutschen Lärmschutzverbandes („Antilärmverein“). München 1908–1911, Verlag der Ärztlichen Rundschau. Ab 1910 als Beilage zum „Arzt als Erzieher“.

い」の準備段階とみなしてよいであろう。

レッシングの論文「騒音」は次の 5 章から構成されている――

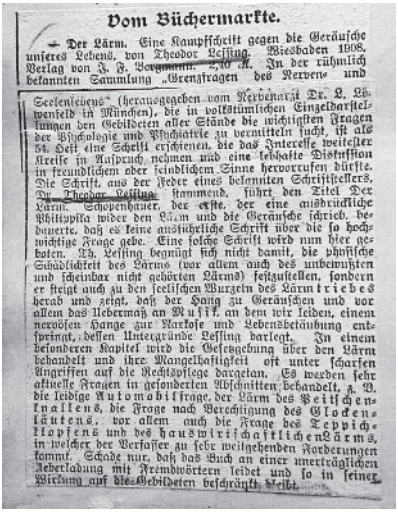
第 1 章　麻痺の心理学　Psychologie der Betäubung
第 2 章　騒音と文化　Lärm und Kultur
第 3 章　敏感な耳　Empfindlichkeit des Ohres
第 4 章　雑音　Geräusche
第 5 章　騒音に対する法的保護　Rechtsschutz wider den Lärm

第 1 章で，レッシングは騒音を引き起こそうとする衝動を取り上げ，それはアルコール，アヘン，ニコチンを求める要求と同じ地平のものであり，「反知性的」な心の動きに起因していると述べている。騒音に対する戦いは，レッシングによれば，「反知性」に対する「知性」[9] の戦いである。社会には「反知性」に向かう「根源衝動」(Urtrieb)[10] があり，それによって通常の意識が麻痺（Betäubung）[11] 状態に陥る危険性が常に存在している。このような麻痺の状態や，それが「知性」に及ぼす苛立ちの様態などがここでは述べられている。第 2 章では，レッシング独自の文化論が展開しており，それは「アジア」や「女性」さらに「イギリス紳士」[12] などを礼賛するところに際立った特徴が表れている。つまり，「反知性」に向かう「根源衝動」に対して抑制の機能が十分に備わっている状況が存在するところ，つまりレッシングの表現を借りれば「寡黙」への傾向性の強いところに文化の発展を見ているのである。騒音は，この視点から「反文化」と定義されることになる。また，自己抑制を重視する東洋の伝統にたいするレッシングの強い共感も，この文脈のなかで語られることになる。

9）Th. Lessing: Der Lärm, S. 3f.
10）Th. Lessing: Der Lärm, S.8.
11）Th. Lessing: Der Lärm, S.10.
12）Th. Lessing: Der Lärm, S.19ff.

第3章では，歴史上の偉大な哲学者たちが騒音に苦しめられてきた経緯が，多くの興味深いエピソードを交えながら語られている。さらに医学，動物学など様々な分野を動員して，耳の進化論・発展論のようなものを具体的な例を挙げて論じ，その上で「敏感な耳」の文化を破壊するような騒音文化にたいする批判が展開されることになる。騒音文化のなかには，ワーグナーのような音楽も含まれている。第4章では，日常の様々な雑音が取り上げられ，それらの雑音を和らげる方法について具体的な提言がなされている。例えば「騒音衛生学」のような新しい研究領域の必要性や，それを実践する社会的施設についても言及されている。最後の第5章では，これまでの論述を踏まえた上で，騒音を防止するために有効な法的措置が必要であるという主張にまで論を展開し，「ドイツ騒音防止連盟」の設立など具体的な計画が記述されている。

以上が，レッシングの論述の骨格であるが，序文のなかでも述べられているように，「騒音や雑音に関する若干の考察」の背後に「筆者にとっての関心事」つまり「長い期間にわたる恨みと怒りから自分を解き放つこと」という「騒音」に対する個人的「恨み」が強く作用しているように思われる。それは特に，騒音を「反知性」に向かう「根源衝動」の現象とみなす点に端的に表れているのではないだろうか。なぜなら，この「根源衝動」については具体的に論証されておらず，自明のものとして前提にされているからである。このような論述の飛躍が，医学や自然科学の専門用語で装飾されつつ遂行されており，レッシングの論文「騒音」の限界点・問題点がこのようなところにあるのは，今日の読者ならすぐに気づくことである。しかしながら，そのような疑似科学性と大胆な論の展開がこの論文の魅力ともなっていたことは容易に想像できることであり，『神経および精神生活の境界域の諸問題』という専門性の強い表題を持った刊行物にとって，分りやすいメッセージを含んだレッシングの論文は，ある種の疑似科学の装いを纏って現れているだけに，巻頭論文として利用価値は高かったと言えるのではないだろうか。レッシングの論文は単独の著作としても



Vom Büchermarkte.

— Der Lärm. Eine Kampfschrift gegen die Geräusche unseres Lebens, von Theodor Lessing. Wiesbaden 1908. Verlag von H. F. Bergmann. 2,40 M. In der rühmlich bekannten Sammlung „Grenzfragen des Nerven- und Seelenlebens" (herausgegeben vom Nervenarzt Dr. L. Löwenfeld in München), die in volkstümlichen Einzeldarstellungen den Gebildeten aller Stände die wichtigsten Fragen der Psychologie und Psychiatrie zu vermitteln sucht, ist als 34. Heft eine Schrift erschienen, die das Interesse weitester Kreise in Anspruch nehmen und eine lebhafte Diskussion in freundlichem oder feindlichem Sinne hervorrufen dürfte. Die Schrift, aus der Feder eines bekannten Schriftstellers, Dr. Theodor Lessing stammend, führt den Titel Der Lärm. Schopenhauer, der erste, der eine ausdrückliche Philippika wider den Lärm und die Geräusche schrieb, bedauerte, daß es keine ausführliche Schrift über die so hochwichtige Frage gebe. Eine solche Schrift wird nun hier geboten. Th. Lessing begnügt sich nicht damit, die physische Schädlichkeit des Lärms (vor allem auch des unbewußten und scheinbar nicht gehörten Lärms) festzustellen, sondern er steigt auch zu den seelischen Wurzeln des Lärmtriebes herab und zeigt, daß der Hang zu Geräuschen und vor allem das Uebermaß an Musik, an dem wir leiden, einem nervösen Hange zur Narkose und Lebensbetäubung entspringt, dessen Untergründe Lessing darlegt. In einem besonderen Kapitel wird die Gesetzgebung über den Lärm behandelt und ihre Mangelhaftigkeit oft unter scharfen Angriffen auf die Rechtspflege dargetan. Es werden sehr aktuelle Fragen in gesonderten Abschnitten behandelt, z. B. die leidige Automobilfrage, der Lärm des Peitschenknallens, die Frage nach Berechtigung des Glockenläutens, vor allem auch die Frage des Teppichklopfens und des hauswirtschaftlichen Lärms, in welcher der Verfasser zu sehr weitgehenden Forderungen kommt. Schade nur, daß das Buch an einer unerträglichen Ueberladung mit Fremdwörtern leidet und so in seiner Wirkung auf die Gebildeten beschränkt bleibt.

**資料 2　レッシングの論文「騒音」の関する書評（1908 年 4 月 22 日の新聞『前進』に掲載，ドイツ連邦古文書館ハノーファー所蔵）**

1908 年に刊行されているが，その際の出版社の広告では，レッシング論文の前書きで提案されたスローガン „non clamor sed amor“ つまり「騒音より静穏を！」[13] が強調され，騒音にたいする戦争開始宣言，プロパガンダとして読まれることが期待されたのである。

最後に当時の書評を資料的な価値を考慮して原文のまま一つ紹介しておこう（以下，資料 2 参照）。これは 1908 年 4 月 22 日の新聞『前進』„Vorwärts“ に掲載された書評である。『前進』はドイツ社会民主党の機関紙であり 1902 年からベルリンに編集局を構えていた。書評の最初に，本論でも紹介したことであるが，この叢書『神経および精神生活の境界域の諸問題』は「すべての階層の教養人士」に向けられたものであり，心理学上の最も重要な問題について活発な議論を呼び起こすことを目指していること。特に第 34 号においては賛否両論が激しく飛び交っている騒音をめぐるテーマを特集していることが紹介されている。その上でレッシングの巻頭論文「騒音」については，騒音に関して書かれたものが少ない現状を批判しながら，この問題が現代における喫緊の問題であることを明確に打ち出している点で画期的なものであることが強調されている。特に騒音を起こす人間の「根源衝動」にまで論が展開していることに，肯定的な評価が下されている。また，騒音に対抗する法律上などの具体的な対抗措置にも触れられている

13）„Der Lärm“ von Theodor Lessing. Verlagsprospekt. Stadtarchiv Hannover, 3NL125 „Nachlass Lessing“, Nr.2555.

ことを書評は好意的に取りあげ，一読を勧めている。しかし一方で，このようなポピュラーなテーマを扱うにしては，専門用語など一般には疎遠な言葉や表現が多く用いられ，一部の専門家にのみ通用するようなものになっている点に批判が加えられている。

書評に見られる肯定的評価と批判はいずれも，評者がこの論文を一読した時の印象に基づく段階に留まっているように思われる。しかしながらレッシングの論文を厳密に考察した場合，また論文掲載時の他の論文との関係性などのメディア環境を考慮した場合，レッシングの論述の根本に存在する矛盾，疑似科学性とプロパガンダによって生み出される問題域が立ち現れてくる。この種の広い意味で文体に関わる問題は，レッシングのみでなく当時の同時代人の精神風景にも繋がるものであり，その面から今後さらに研究を深化させる必要があろう。